

高い意匠造形力により、都市空間や建築空間のアートデザインをリードする

金物のクラフトアートで創業、「作れないものはない」という精神で、あらゆる素材に展開

「鉄の街に金属工芸の灯を」と金属工芸に魅せられた初代代表取締役・藤波耕司氏を中心に4人の若者が集い、1976年に金物アート工房「クラフト鋳絵」が設立された。

社名の「鋳絵」は、「金鋳で絵を描く」という意味に由来し、絵を描くことが金属工芸の基礎であるという信念が込められている。

創業当初からアート性の高い作品を手がけ、「斬新で洗練された感覚が目を引き」として、当時の朝日新聞や西日本新聞などでも紹介された。

創業間もない頃から、同社に根づく「作れないものはない」という精神のもと、素材や工法にとらわれず、あらゆる顧客の要望に創意工夫で応えてきた。現在では、金属を中心に、木・石・ガラス・照明など多様な素材を横断的に扱い、顧客も個人から民間企業、公的機関にまで広がり、全国各地からの依頼に対応している。

公共施設ではサイン・案内板・デッキ・ベンチ・モニュメント、商業施設では看板・オブジェ・什器など、個人住宅では門扉・表札・家具などのインテリアまで、幅広い分野で実績を重ねている。代表的な事例としては、JR九州のクルーズトレイン「なつ星」のエンブレムや車内装飾（設計・製作）、沖縄平和祈念公園のモニュメント（デザイン・設計・製作）などが挙げられる。



NU:KUJU サイン

企業概要		DATA
企業名	株式会社鋳絵	
代表者	藤波 絵里子	
所在地	北九州市小倉北区東港一丁目1番21号	
TEL	093-561-2511	
FAX	093-561-5099	
資本金	1,000万円	
創業	1976年	
従業員数	21名	
事業内容	都市空間・建築空間におけるアートデザインの企画・設計・製作、施工を一貫して手がける総合アートファクトリー	
URL	https://www.tsuchie.jp/	



「ただひとつ」を生み出す抜きんでた意匠造形力

「お客様の夢やイメージを、素材にとらわれることなく具現化し、世の中にない「ただひとつ」を生み出す。それを見て驚き、喜んでいただくことが、鋳絵の使命です」と語るのは、2代目代表取締役・藤波絵里子氏。

鋳絵が手がける公共施設向けのベンチや案内板、サインなどを見れば、その一つひとつが「鋳絵らしさ」を感じさせる独自性を備えている。こうした製品を生み出すために、同社では「意匠造形の心」を大切にしてきた。

同社では、意匠造形力を「お客様の夢やイメージを具現化する力」と定義し、社内的には「意匠造形はものづくりの原点であり、デザイン・設計・製作を一貫して行うこと」と位置づけている。製作対象物のコンセプトや構想を形にするには、工芸的な感性と工業的な技術の両方の視点が必要であり、それを支える一貫体制が不可欠である。

鋳絵は、工芸的な技術と工業的なものづくり技術を融合させ、卓越した意匠造形力によって顧客の夢やイメージを形にし、高い信頼を獲得している。

構想段階からお客様に伴走する設計・製作体制

鋳絵の顧客対応体制は、「構想段階からお客様に伴走する設計・製作体制」と表現できる。プロジェクトの初期段階から顧客とともに最適解を追求できる点が大きな特長である。営業担当者にはデザインや設計に明るい人材が揃い、意匠・設計担当者はものづくりの知見を持ち、製作現場には高い職人技を持つ技術者が控えている。

これらのスタッフが連携し、プロジェクトの進行に応じて役割を担いながら、顧客とともに理想の形を追求している。たとえば、建築家やデザイナーから図面が提供された場合でも、その背景にある想いやコンセプトをくみ取り、新たな視点を加えた提案や、ものづくりの観点からの設計提案を行うことも少なくない。

こうした伴走型のサポート体制は、日本を代表する建築家やデザイナーからも高く評価され、リピートオーダーが多いことにもつながっている。

社員が働きやすい環境づくりが進む

2023年、事業承継により代表取締役就任した藤波絵里子氏は、「つくり、続けること」を基本理念に掲げ、「人の手」で生み出される仕事の価値を次世代へつなげるべく、組織体制の強化と職場環境の改善に取り組んでいる。

その一環として進めているのが働き方改革である。年間休日の増加に加え、創業以来初となる製作部門での女



代表取締役
藤波 絵里子 氏
福岡県北九州市出身
武蔵野美術大学を卒業後、広告代理店・出版社を経て、2020年に（株）鋳絵に入社。
2023年5月、代表取締役に就任。
職人の社会的地位の向上を掲げ、地域と共に歩み、ものづくりの力を社会に広げることで未来を切り拓く企業を目指している。

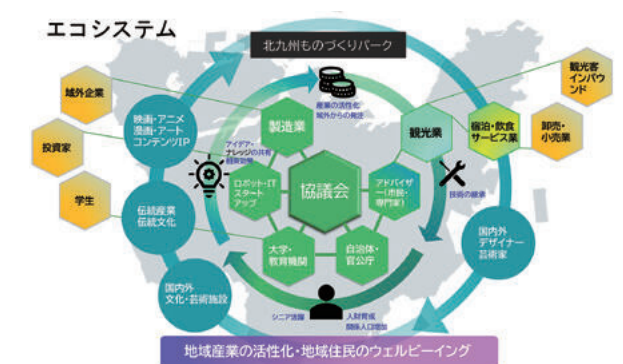
性採用も実現。有給休暇の取得推進や介護休暇制度の導入、さらには社内コミュニケーション活性化を目的とした懇親会費用の補助など、社員が働きやすい環境づくりに向けて着実に改革を進めている。

北九州ものづくりパーク構想を打ち出す

藤波代表取締役は、「伝統的なものづくり企業として地域に貢献したい」という強い想いを持っている。

「AIやロボットが一般化する時代だからこそ、人の手でしか生み出せないアート性の高いものづくりの価値が、より一層高まるのではないかな。そうしたものづくりが、地域課題の解決や地域活性化にも貢献できるのではないかな」と先を見据える。

その想いのもと、藤波代表取締役が10年先を見据えて構想しているのが、「KITAKYU FABRICA」である。この構想は、南フランスのレ・マシ・ド・リルをモデルに、地域の製造業・IT企業・建設業・サービス業などが連携し、「アートとテクノロジーが交差するものづくり」を観光資源化することで、北九州全体の活性化に貢献しようと、構想を膨らませている。



北九州ものづくりパーク構想

取材を終えて

金物クラフトアートの職人技を基盤に、「作れないものはない」というものづくりへの姿勢を貫き、創意工夫を重ねながら多様な顧客ニーズに応えてきた鋳絵。

その歩みの中で培われた抜きんでた意匠造形力こそが、「ただひとつ」を生み出す力となり、同社の存在価値を高め続けていることは、紛れもない事実である。